

「日本国土防衛軍」発足、式典開催!



日本国土防衛軍式典の様子。



日本国土防衛軍

日本国土防衛軍紋章のデザイン

日本は歴史的な転換点を迎えた。去る昭和37年9月30日に発布された改正日本国憲法に基づき、準備が進められてきた「日本国土防衛軍」が、ついにその第一歩を踏み出したのである。東京・旧陸上自衛隊駐屯地では、設立祝典が行われたものの、会場周辺には期待と同時に深い懸念を抱く国民の声も響き渡った。

午前9時、晴れ渡る秋空の下、設立祝典は開始された。真新しい深緑色の制服を纏った防衛軍将兵が整列。その精悍な姿は、確かに国の新たな力強さを象徴するようであった。

式典の冒頭、内閣総理大臣は、「我々は本日、平和国家としての誇りを胸に、しかし同時に、自らの手で国を守り抜くという断固たる決意を表明する」と力強く演説し、防衛軍設立の意義を強調した。続いて、初代日本国土防衛軍司令官に任命された田中一郎陸将が登壇し、「国民の生命と財産、そしてこの美しい国土をあらゆる脅威から守り抜くことを誓う」と宣誓した際には、一部から割れんばかりの拍手が起こった。

祝典のハイライトである防衛軍部隊による観閲式では、最新鋭の国産戦車「九〇式戦車(仮称)」や国産戦闘機「震電改(仮称)」がその雄姿を披露。上空を轟音を響かせながら編隊飛行する「震電改」の姿は、日本の技術力の高さを内外に示し、歓声と同時に、静かなざわめきをも生んだ。全国にテレビ中継された祝典の様子は、多くの国民に様々な感情を呼び起こした。

日本国土防衛軍の設立は、単なる名称変更ではない。改正された憲法第9条には、「日本国の平和と独立を維持し、その安全を確保するため、専守防衛を旨とする日本国土防衛軍を保持する」と明記され、その役割が明確に定められた。特に、専守防衛の原則が改めて強調された点は重要である。防衛軍は、他国への侵略を目的とせず、あくまで日本の防衛に特化するという姿勢を明確にしている。政府はこれにより、周辺諸国との不必要な緊張を高めることなく、安定した国際関係を維持できると説明している。

今回の防衛軍設立に対する国民の反応は、まさに賛否両論が渦巻いている。並行日本新聞が実施した緊急世論調査によると、「日本国土防衛軍の設立を支持する」と回答した国民は半数強の52%、「支持しない」と回答した国民は38%、残り10%は「どちらとも言えない」と、意見が二分される結果となった。

防衛軍の設立は、日本の外交・安全保障政策に大きな影響を与えることは必至である。日米安全保障条約のあり方や、アジア太平洋地域における日本の役割、そして国際社会での発言力など、多岐にわたる変化が予想される。

しかし、国民の意見が分かれる中、政府にはより丁寧な説明と、透明性の高い運営が求められる。防衛軍の活動が、真に日本の平和と安全に貢献し、国民の理解と信頼を得られるかどうか、今後の大きな課題となるだろう。徴兵制の導入など、国民生活に直結する議論については、慎重な検討と幅広い国民的合意形成が不可欠となる。

日本は、新たな国防の道を歩み始めた。この一歩が、平和国家としての日本のあり方を再定義する中で、国民が抱く期待と不安をどのように乗り越え、真の平和と繁栄を築いていくのか、国内外から注目が集まっている。

国防の新時代か、平和への警鐘か

並行日本新聞

1962年(昭和37年)
10月1日(月)

発行所

弁天舎



info@parallel-nippon.jp

号外

並行日本新聞・号外は左記サイトでもご覧いただけます。
www.parallel-nippon.jp

8月27日(水)より開催の弁天舎特別企画・シモヒロヤス個展『パラレルニッポン』にて全ての号外新聞を展示予定です。

弁天舎特別企画

HIROYASU SHIMO SOLO EXHIBITION

シモ ヒロヤス個展2025

PARALLEL
NIPPON

2025 8/27 WED.-9/7 SUN.

OPEN 12:00 - CLOSE 20:00

会場 | 日仏会館ギャラリー
東京都渋谷区恵比寿3-9-25

パスポートチケット/500yen (未就学児無料)



メディアアーティスト

作詞家

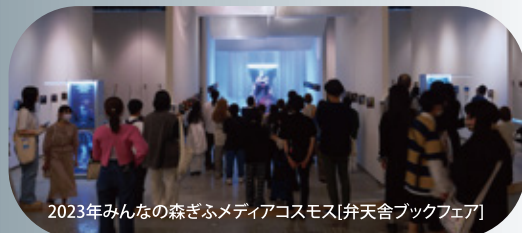
神戸芸術工科大学教授

シモ ヒロヤス

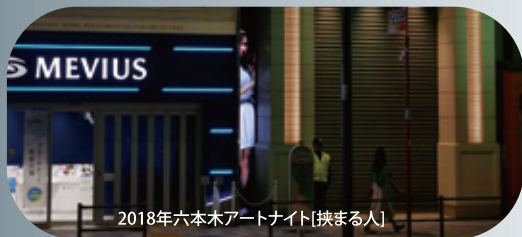
志茂 浩和

1960年大阪生まれ、東京在住。東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻中退。神戸芸術工科大学教授。1994年 Sony Music 主催の DEP での受賞を契機に3DCGを修得。同社よりダリの絵画世界をゲーム化した「Incarnatia」(1997)を発表する。以降、プライベートアニメーション制作に取り組み、国際的なCG学会Siggraphなどで発表する。神戸ビエンナーレ2007以降、映像インスタレーション作品に取り組み。日本文化の発展的継承を基本テーマとしながら、特撮映像の影響を反映した作品で観客に現代を俯瞰する視点を提供することを試みている。六本木アートナイト2018に出品した「挟まる人」は、第22回文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員推薦作品。第21回CSデザイン賞準グランプリに選出されている。2022年以降、生成AIを用いた作品に取り組み、「弁天舎」という架空の出版社をテーマにした展覧会を開催している。

特設サイト/ www.parallel-nippon.jp



2023年みんなの森さぶメディアコスモス[弁天舎ブックフェア]



2018年六本木アートナイト[挟まる人]



2020年門司港アートワークス[雨の碑]